

ともしひ会ニュースレター

2016.JUNE

東日本大震災 ともしひ会 事務局

960-8585 福島県福島市花園町3番6号

024-531-6805 Email:s-soko@ssg.ac.jp

2011年3月11日、この日、東日本大震災そしてこの福島の地においては

東京電力福島第一原子力発電所の事故

という悲しい出来事が起こりました。

被災地では、家や家族を失い、多くの経済的不安を抱え、

喪失感と共に将来の夢もあきらめざるを得ないような

状況下にあつた子どもたち。

そんな子どもたちの声に耳を傾け、

その健やかな成長を見守つていきたいと立ち上げた

「東日本大震災ともしひ会」へ

日本各地、そして世界中の多くの皆様がご支援下さいました。

「あたりまえをあたりまえ」に戻したい。

困難な状況の中、前向きにチャレンジする子どもたちを少しでも多く支援したい。

そのような皆様の思いが叶い、そのご支援により生きる力をいただき、

子どもたちはたくさんの悲しみを乗り越えることができました。

そしてこのたび4名の短大生が

無事社会へ果立つこととなりました。

希望に胸ふくらませ、故郷の復興を誓いながら卒業という大きな節目を迎えた

彼女たちの晴れやかな笑顔には胸が熱くなる思いです。

ご支援していただいている全員からご支援いただいたすべての皆様へ

感謝のお手紙が寄せられました。

彼女たちの感謝の思いをここにお届けします。

1JRCもよろしくお手紙をありがとうございました。皆様のおかげで、1016年3月、桜の聖母短期大学キャリア教育学科を卒業することができました。今は、喜びと寂しさで胸がいっぱいです。四月からは四年制大学に編入学し、遊び学問の道を歩んでいきます。このようないい進路を実現することができたのも、皆様の大なりお手紙がございました。

聖母短大での学びのおかげです。本当に感謝しております。私の家庭は父と専業主婦の母、高校生の弟、中学生の妹、そして祖父と祖母の一人家族です。会社員の父の収入だけでは家計は厳しく、また、東日本大震災によって旧宅が半壊したため、現在は毎月の万円の新宅の住宅ローンの返済に追われています。また、震災によって敷地内の石垣が崩壊したため、修理費用の30万円を家計を圧迫しています。地元が放射能汚染の影響による避難生活も家計を圧迫していました。

高校生の弟は四年から専門学校に進学するところが決定しており、さらに中学生の弟も四年から、私を含むこれまでの教育費が多大なものになってしまったのは明らかです。事実、私の編入学どころの進路もなかなか家族から受け入れてもらえないませんでした。そのような状況の中、皆様のJRC支援は私にとって、そして家族にとって大きな支えであり、希望です。将来への貴重な糧となっていました。

聖母短大を卒業後も、立ち向かう風を体に感じつつ、自分の夢に向かつて走り抜けていきます。成功と挫折は繰り合わせです。強いて持ちたぐり越えていかなければならぬ。JRCをチヤンヘに愛され、怖がらずに様々なことに挑戦していくのです。前を見て、ねばめとしあわせが待つところだと思います。理想通りにはじかならないかもしれませんですが、そのよだとおもは皆様からのJRC支援を思い出しながら頑張っていきます。最後に、今までお世話になったお手紙へ

すべてを失つたと思つたあの日から。。。

【東日本大震災発生時・避難所生活】

一一一、一四三、一四。やの日本は中學校の卒業式で
した。小田は中學生として最後の日になら。その頃つい
し懸じつけ、やも高校生になれるとこに嬉しさわあ
りとてわ素敵な一日になると思つてござした。たゞや

この在校生や先生方に見送られ無事に卒業式が終わりました。友達と別れ、家に帰った私はお酒を飲んで、題間で祖母と兄と話をしました。その時ですか。今も

スマートルが壁の上上がりこぼした。アーリーは腰を下ろす。
はやもなげに判断した私たわせ、来た道を可むれ西へ
じしまつた。しかし、余震が續く中、窓の側面のコタ
ーハは難い。やつひの思ひで像く医のじかだらわま
した。家に戻つてゆくのじゆう。父が会社から歸つ
てもらいました。家の状況を説明し、庭の止づけを
しよいとしたそのと並んでした。

「津波だー、津波がきたー」 ひだるまな声が聞こべました。そのまま家にいたり危なこと思った私たちは父の車に家族を乗せ津波に追われながら逃げました。あと一步遅かつたら私たちはいじにはいなづかもしだな。それなかつたら私たちはいじにはいなづかもしだな。歩くのが神島市のおいま縁(体育馆)で避難しました。この日から約五ヵ月間、体育馆での避難所生活が始まりました。

その後、いろんな場所を転々としながら避難し、最終的には神島市のおいま縁(体育馆)で避難しました。この日から約五ヵ月間、体育馆での避難所生活が始まりました。

まあか、体育馆で生息する虫が来るといはて窓のひわみほせんでした。半袖ないしを医に戴き、みんなで雑居震しながらの生活でした。食事はおじぎりや菓子パンなどを使いつけてやりました。また、自衛隊の方が外に簡易の宿舎を設置してました。まだ、自衛隊の方が外に簡単の数日が経つてお風呂に入れることが可能になりました。当たり前だと思つてごった生息が、じつは何んでいたいなものだと思つてました。支撐ひじでやつたカ々立せかじも並んでいたいに感謝してしまいました。

【学校生活】

私は、小高商業高等学校に四年かの間のじゅうが長いが長いつらつらました。しかし、東日本大震災によつて本校舎での学校再開はできませんでした。一か月遅れでサテライト校のイム校にして福島商業高等学校の相馬東高等学校の校舎を一部譲り受けで学校を開くことになりました。私は福島市の体育馆で避難所生活を送つてました。そこで、体育馆から福島商業高等学校のナットハイスクールへ通つてじゅうになりました。

一年生の一年間は福島商業高等学校のサトウハイツ校舎に通じ、一学期からは郡山市に限り仮設および雇用促進住宅での生活になつた。郡山市立原町高等学校のサトウハイツ校舎の一部を間借りしての学校生活となつました。この集約化のために郡山市において原町高等学校の一部を間借りしての学校生活となつました。その仮設校舎で、一学期には、小高商業高等学校の仮設校舎が原町高等学校の校庭に通じてられました。その仮設校舎で、等学校の校庭に通じてられました。その仮設校舎で、二年生も通じました。三年間、一度も本校舎でなく、二年生も通じました。今ま、こいつが仮設校舎

桜の聖母短大食物栄養専攻 卒業生 ②

- 2 -

現在、私は彼の訓印短歌大賞に選ばれた著士になら
たための勉強をしていました。いいじいして感じ回
かって頑張れるのが、日々がいいなぎでござつてこ
る方々がいるからJINだと思つてます。特に
感謝の気持ちを持たぬから社会にして頑張
に貢献できるような人間になれるよう頑張つ
たいと想いもよ。

押野　貴介の便、必ずお手取便にてお届けいた。平素は櫻原のJRC配達を頼んで、豊く恩返ししておられた。専門の業者をしておられた。お仕事おめでたし。

思えばまだ私が高校生の頃、私は大学に進学するのを諦めていました。東日本大震災で父が職を失い家の経済状況が悪化したため

おかげでハルバイトは裏休みなどい短縮のものをやるだけにして、普段は最終回の授業や一年生に適して時間の調整を取らなければいけない知識を学ぶことができた。私は一年生次にいたが、毎日は感じじつとおり、高校の時に学びたかったと思っていたことを毎日感じられることが出来た。

です。その中、一人の姉の一人は桜の聖母短期大学に、もう一人は医療系で私立の四年生大学に通つており私も大学に進学した

もし、むちしげ会の支援を受けていなかつたら毎日アルバイトを入れており、授業もやりたこものが取れなくなってしまってこたかもしたがせ。

高校で学んだ行く流れ、ひとつ争いを始めたことこの感じが深くなってしまった。小さな間、大学に行きたが家に経済的負担はかかるくなってしまってもやめました。

そんな時に、ともしう会のことを知りました。桜の聖母短期大

学に通いつてこの姫がいかゞかの救援を歴士始めたからです。初め姫からいかゞかが領のいしを聞たし、ついでその救援を取

かのなりのない私も大學に通ひたいがどうのかもしなじと
思いました。そのことを語り大學に進学したいと話を始めた
親も快く承諾してくれました。両親も私が進学したいと思つて
いるのを反対はしなかつたが現実的に経済状況が厳しいので
悩んでいたと思つます。その私たるに希望を助けてくれたのがヒ
もしびでした。

それがかの晩の講師短縮大学にて開かれた一回講が行われて、勉強に興味をもつておられた。私が晩の講師短縮大学にて教かつたのはじめからがおもい知り大学に進学でおひとつの希望が持つたからだと思つね。

大学に入学した頃には父の再就職先も決まつてはいたもののまだまだ家の経済環境は厳しく、零用金とし出べる父の収入は半分近く少ないままです。大学に入つたらアルバイトをしないことはいはないと思つていたのですがともしだ娘の世話を吸収された

回してもらひた支援を忘れずに将来自分が社会人にな
困つてうる人がいたら手を差し伸べる所に」とい
方が受けた恩を忘れずにほかの人に与えてほしい」とい
巡つて私を支援するのに協力していくといった支援に
あると思つました。

敬具

感
謝

むかし私が1年次で教鞭を取った時に頭もありましたが、この1年間もまた、本当に感謝の気持ちでいっぱいでした。1年の1年次授業のおかげで私は学校に通いはじめる前から、本題の感謝の気持ちがわかつて、卒業後はもう1つの恩を忘れないで、感謝の気持ちをもつて前进して

じめたこも頃から。

向書の旅、時不ずかずおもひ。JR東洋の段、お慶び申じよむ。お素は格別のJリ高配を賜り、喜んで申じよむ。私は平成二十六年十一月から、東日本大震災といわしづる様からの救援を取扱いなつた。本日せや田中氏のJリ救援に就て、御禮申じよむ。卒業後のJリ救援も兼ねて筆を執らせて貰おう。

Jリ一年間、及ばずながらお兼じ学校生懇として努力を以てこつまつした。振り返りあるじ頃いたご頃からJリ申すが、曲分なつて御意義なまつめに御生れ活を過ぐた。Jリがだめほつた。

私は短期大学卒業後、製菓専門学校へ進しました。それで私の田舎であるお山を開いたのです。震災前は、昔からの山林やお山のトトロホールとなり、美味しいお漬物を作っていました。そこでの収入で店を営んでいたところを持ちました。しかし、田口が流れた今も復興が必要な福島を離れて行きました。やがて漬物になりました。私の田舎であるお店を故郷である福島に構え、福島産の農産物を使いつ、食の安全と美味しさを云ふました。これがよみがえりました。微力ながら復興の手伝つてをかねてこの新たな道がございました。Jリでの2年間、勉強しながらもため、夢のためにJリ救援は大切に使わされました。Jリがだめほつた。Jリ救援金がなけだよどむなどいじかれていました。たまつました。Jリ勉強でJリ救援金を夢の実現を形づくつたと思つます。

世情厳しくてもかかわらずおせあ、やがてやれたた東日本大震災といわしづるの皆様、Jリ心から御礼を申し上げます。本日せや田中氏とのJリ救援を

皆様の益々のJリ救援をお祈りして。御禮申す。

震災以降、はや五年の月日がたとうとしています。
東北各地で復興が進み、皆が未来に向かって歩み始めている中、
福島においては原発事故という未曾有の人災により
復興の道のりには多くの困難があります。

ご支援をいただいている学生の多くは5年間の成長過程において
いくつもの困難、苦労を抱えながらも
皆様からの経済的な支えの上にたくましい精神力を育み、
そして震災と原発事故を体験したことで、
いのち、生きる意味、人生の生き方を真剣に考え、
自ら生きる力を育み大きく成長しています。

皆様からのお力添えを励みに
今後も未来ある福島の子どもたちを支援し、
寄り添つてまいりたいと思います。
末筆となりましたが皆様からお寄せいただきました
ご厚情に重ねて御礼申し上げますと共に
皆様の上に神様が豊かにお報いくださいますようお祈り申し上げます。
感謝のうちに。

東日本大震災ともしひ会実行責任 紫田香代子
事務局 熱海 紀子・齋藤 桑子